

『脈訳簡略』所載の脈状記載について

中川 俊之

鍼灸中川／日本鍼灸研究会

国立公文書館内閣文庫所蔵の刊本『脈訳簡略』一卷(195函177号)は、和語で著された横本の脈書である。序跋は無く、本文16葉からなる。そのうち13葉裏までが本論で、以下は附論と考えられる。本論は「知気血之虚実」から「反常之脈」までの17条で構成され、その後に本論成立の始末が述べられている。そこに「右条々、壺静老翁書注す処の一卷なり」とあり、本論が初代曲直瀬道三の脈書とわかる。また「是を書写する次に承師訓の詞を私と云号して書きおく」とあって、書中の「私云」が道三の口授であることも知れる。末尾に巻末題「サスノミコ」が置かれている。次いで第14葉～第16葉は「二十四節之脈七表八裏九道也」と題され、24種の脈の形状と脈證を記述する。内閣文庫所蔵本の刊行年是不詳であるが、『脈訳簡略』にはこれとは異版の延宝八年(1680)本が伝存する。また成書年は『国書総目録』に天正5年(1577)跋とするが、確認に至らなかった。

道三の脈学資料には、『脈訳簡略』のほか、『類證弁異全九集』(1544)卷之一、『診切枢要』(1566)、『医学指南篇』診切指南篇(1571)、『脈論』(1571?)、『医家要語集』察脈要語(1572)、『診脈口伝集』(1577)、『老師雑話記』(1577)所収の脈診の記載、『切紙』(1538～1581)などがある。道三の脈学は、『類證弁異全九集』卷一に始まり、『診切枢要』で確立された。『診切枢要』は、気血(榮衛)、内外(浮沈)、寒熱(遲數)、男女の脈、脈診部位の左右、人迎氣口診や26対の脈状、浮沈遲數の脈證などで構成され、以後の著作でもその枠組は基本的に維持されている。

『脈訳簡略』と『診脈口伝集』は同じ和語による脈診入門書であるが、『診脈口伝集』が29条で構成されるのに対し、『脈訳簡略』は略半分の17条である。ただ、『脈訳簡略』にのみ見られる論述が多く、道三の脈学を知る上で不可欠の書である。以下、本書のみに見られる論述を列挙する。

第2条「知寒熱」では、一息四動を平脈として遲數の弁別を行う。『診脈口伝集』の「遲數之寒熱」にも類似する記述があるが、一息を医者呼吸とするのは『脈訳簡略』のみである(『診家枢要』に患者の呼吸を一息とする記述がある)。

第4条「人迎氣口の脈の大小をとりわけて外邪内傷をすること」では、人迎、氣口がそれぞれ「ひとえに大」の時に外邪、内傷と診察する。人迎と氣口の比較で、一方より強い場合が「ひとえに大」である。

第10条「左右の輕重」では、左右寸関尺に五藏の菽法を配当し、左寸(六菽)関(十二菽)尺(十五菽)、右寸(三菽)関(九菽)尺(十五菽)とし、「如此、輕重あるゆえに、右は左よりも少しかるくし」と解説する。これは、『診切枢要』以降論じられた「左部剋右」の論拠である。

第11条「男女の異」は、『類證弁異全九集』卷一の「男女之異」以来、必ず触れられる男女の脈を内容とするが、男は火であり「下より上を営む」として、寸(軟大)、関(中大)尺(沈軟)、女は水であり「上より下を営む」として、寸(軟弱)、関(中軟)尺(濡滑)とする。他の脈書が、男=左、女=右といった記述であるのに対し、男女の脈を寸関尺の脈状の差違とするのは『脈訳簡略』のみである。

第12条「四脈を為祖」は浮沈遲數の四脈による診察(四脈の有力、無力)を述べる。四脈は、道三の脈診の中心的な診察で、『診切枢要』、『医学指南篇』、『医家要語集』、『診脈口伝集』、『切紙』の計6書にも同様の記載がある。四脈を祖とするのは『医学指南篇』診切指南篇三の「四脈為祖」が初めであるが、『脈訳簡略』は「祖はおやかたとよむなり。しかれば、七表八裏九道とて二十四脈、其外、脈の數おおしといえども、浮沈遲數の四脈を以て一切のおやかたとする儀なり」と解説している。